

術後経過は、3例とも良好であるが、炎症の再燃に関する嚴重な経過観察が肝要である。

2) 小児期白血病治療中に合併した心筋障害について

廣川 徹 (新潟こばり病院) 小児科
佐藤 誠一・塚野 真也
佐藤 勇・内山 聖 (新潟大学小児科)

われわれは白血病治療中に左室機能低下を認めた症例を経験したので報告する。

【症例1】12才女児。診断：APL 現病歴：1987年1月(6才時)にAPL発症。DNR, ADMにて寛解導入。以後維持療法としてACM投与し10月に終了した。DNR+ADM計240mg=300mg/m², ACM 600mg=750mg/m² 使用した。10月22日より胸痛、咳嗽が出現し左心機能低下を認めた。治療：強心剤, 利尿剤, CoQ 10投与で次第に心機能は改善した。心カテ時に施行した biopsy では異常所見を認めなかった。

【症例2】14才男児。診断：common ALL 現病歴：1984年3月(6才時)にALL発症。プロトコール CCLSG-I-841-Cで治療開始。'87年4月治療終了。'90年2月 relapse し CCLSG-R-891で治療再開。'92年4月心エコーでEFの低下を認め同年5月 dyspnea, 胸痛出現したため同年6月新大小児科入院。入院時まで合計 ADM 460mg/m², MIT 156mg/m² 使用された。治療：強心剤, 利尿剤, captoril, 等で一旦は改善したが病状は一進一退を繰り返している。

anthracycline 系による心筋障害は不可逆的なものと考えられていたが症例1では左室機能も改善し biopsy でも異常所見を認めず必ずしも不可逆的とは考えられなかった。

3) 糖尿病症例における虚血性心疾患の検出 —ジピリダモール負荷心筋シンチを用いて—

津田 隆志 (木戸病院) 循環器内科
津田 晶子・矢田 省五 (同内科)
浜 齋

糖尿病患者の死因として虚血性心疾患の割合が高くなっており、糖尿病患者における虚血性心疾患のスクリーニングが臨床における大きな課題となっている。今回、狭心症や心筋梗塞の既往のない糖尿病症例を対象に、ジピリダモール負荷タリウム心筋 SPECT を施行し、無症候性心筋虚血例の頻度・特徴を検討した。対象はII型糖

尿病患者44例(平均年齢62歳)である。SPECT 画像による虚血例は21例(48%)で、2例は2枝病変、19例は1枝病変を疑わせた。冠動脈造影では、虚血例3例中有意狭窄を1例、スパズムを1例に認め、非虚血例では、狭窄を認めなかった。虚血例は非虚血例に比し、年齢・冠危険因子・糖尿病合併症の程度に差を認めなかった。ジピリダモール負荷試験により、症状出現7例(胸痛3例), ST 低下11例に認めたが、いずれも心筋虚血の指標となりえなかった。また、アミリフィリン・亜硝酸剤使用は1例であり、本負荷試験は糖尿病患者に安全に施行できた。

第58回新潟内分泌代謝同好会

日時 平成4年11月7日(土)
午後2時開会
場所 新潟東映ホテル
2階 朱鷺の間

I. 一般演題

1) Steroid and irradiation therapy を施行した Malignant exophthalmus の2例

鈴木 克典・千葉 泰子
山崎 雅俊・他
内分泌班一同 (新潟大学第一内科)

眼球突出は患者にとって、身体的のみならず、精神的にも大きな負担となるものであり、この治療法の確立はバセドウ病の臨床において、最も重要な課題の1つである。今回我々は新たに steroid と放射線の併用療法プロトコールを作製し、そのプロトコールにて治療した悪性眼球突出症2例を経験したので報告する。プロトコールは、ステロイドにベタメサゾンを使用し、放射線療法開始と同一日に開始する。ベタメサゾンは12mg 点滴静注から開始し12mg 4日間, 8mg 4日間, 4mg 4日間, その後経口で2mg 4日間, 1mg 4日間で終了し、総量108mg。放射線照射は1日2Gy, 10日間, 総量20Gy 照射する。なお、効果が認められた場合は、ベタメサゾン6mg 点滴静注4日間を追加することにする。

2例とも眼球突出度では著明な改善は認められなかったが、眼瞼浮腫, 結膜充血, 結膜浮腫が消失し、客観的効果判定として用いた MRI でも、外眼筋の明らかな